或問　WAKUMON　211
No.29,（2016）pp.211-228

馬若瑟(Prémare)『漢語劄記（*Notitia Linguae Sinicae*)』第二部訳注(III)

千葉謙悟訳注

＜凡例＞

・底本は何群雄編(2002)『初期中国語文法学史研究資料　プレマールの『中国語ノート』』三元社を用いた。これはフランスのパリ国立図書館蔵本(Anglo-Chinese College 1831)の影印本である。

・本文中に用いられた漢字、ローマ字標音は誤植も含めできるだけ忠実に記した。右から左に向かって書かれている漢字文字列は左から右に進むよう改めた。本文中に用いられた漢字はすべて「　」でくくり、訳文と区別した。漢字に付されたラテン語訳については“　”を用いて示す。

・中国語がローマ字でのみ書かれている部分はその表記を記し、その直後に〈 〉を付して推定される漢字を加えた。

・声調記号や気音の表示がなかったりそれらが誤っているように見えたりと、ローマ字表記には問題が頻出する。本文では原則としてローマ字標音について注記しないが、特に注意を要する場合にのみ(sic)の記号を付した。

・訳文において日本語を補う必要がある場合には適宜[ ]で示した。

・英訳本において削除されている箇所は下線で示す。原文にはないにもかかわらず、意味を明確にするため以上のフレーズや文が追加されていると判断される部分については注で指摘した。

・対照のため用いた英訳本は *The Notitia Linguae Sinicae of Premare. Translated into English by J. G. Bridgman.* Canton: Printed at the Office of the Chinese Repository, 1847 である。

第 16 節 意味を強める小詞について

第一に、「愈」yu、「益」y、「彌」mi は、十分に多くの例が教えるとおり、我々の“ますます多くの〜”、“かくも多くの〜”に相当する。「此愈近彼愈遠」[1]tsee yu kin, pi yu yuen“片方が近づくほどもう片方は遠くに去っていく”。「故愈力愈動而愈不至」[2]kou yu li yu tong ell yu pou chi“彼が意を注ぎ努力するほど、達成からはほど遠くなる”。「愈」は[「而」の前に]2 度現れるが[それらはともに]同じ[文法上の機能]のために用いられているということを示すべく「而」ell を置くのである[3]。「去聖益遠而益薄」[4]kiu ching y yuen ell y po“聖人から遠く離れるほど、我々の徳は軽く浅くなる”。上[の引用「故愈力愈動而愈不至」]で「而」ell は必要なものであったが、ここでは単なる飾りである。Yang-tsee<楊子>は火について[以下のように]言った、「用之而彌明.宿之而彌壯」[5]yong tchi ell mi ming, sou tchi ell mi tchouang“あなたが火を使うほど明るく光を放ち、これを集めるほどより強い力を持つ”と。[この引用では各文に]二つのフレーズ[「用之」と「彌明」、「宿之」と「彌壯」]があることを示すためにどちらにも「而」ell を置いたのである。

第二に、「況」hoang[sic][6]がしばしば繰り返される。[『易経』の]Ven-yen<文言>の章では[以下のように]言う、「天且弗違而況於人乎況於鬼神乎」[7]tien tsie foe ouei, ell hoang yu gin hou, hoang yu kouei chin hou“天は敵対するものではない[から]、人間は抵抗せず、精霊に至ってはもっと逆らわない”と。「而」「於」「乎」という 3 つの小詞は、いつもではないものの、この[「而況」や「況於…乎」という]形でよく「況」hoang とともに現れる。「真徳不待於事.況於言乎」[8]tchin te pou tai yu ssee, hoang yu yen hou“真の徳は君が大きなことをするようには求めないし、大きなことを言うことなどなおさら欲しない”。

第三に、「矧」chin も「況」hoang とほとんど同じである。Chou-king<書経>は言う、「至誠感神矧茲有苗」[9]tchi tching kan chin, chin tsee yeou miao“最高の誠実さは精霊を動かすほどであ

---

[1] 『荘子』斉物論注。

[2] 欧陽修「答呉充秀才書」。なお「動」は本来「勤」であるべきところである。

[3] 「而」の前の「愈力」「愈動」はともに「而」の後ろにある「愈不至」と呼応することを述べている。プレマールの見解では、「而」によってそのような文の構造が示されている。

[4] 欧陽修「代人上王枢密求先集序書」。なお「而」は本来「世」であるべき。また句読の面から言えば引用の後にさらに「或衰」を加えるべきだろう。

[5] 『法言』問道。

[6] 以下、「況」の注音はすべて hoang である。英訳本も Hwáng と注音する。

[7] 『易経』乾・文言伝。

[8] 前半部が「固不待施於事」であれば欧陽修「送徐無党南帰序」に見える。

[9] 『書経』大禹謨。

るから、この miao<苗>の人々はどれほど動かされることであろうか”と。よく「矧曰」[10]chin yue“私はさらに言う”という形も現れる。

第四に、最高[の段階]であることを示す他の小詞も数多い。例えば「至聖」[11]tchi ching“極めて神聖な”、「極高明」[12]ki kao ming“極めて高く明るい”、「最窮」tsoui kiong“極めて貧しい”、「甚善」[13]chin chen“最善の”、「謬焉甚矣」[14]mieou yen chin y“極めて見苦しい過ち”、「焉」はここでは単に飾り[である]。「厥田上上」[15]kue tien chang chang“あの畑は良く、極めて肥えている”。

第 17 節　疑問を表す小詞について

私はこの[節]を、[文の]様式について扱う第四章に回すこともできた。しかしこの節はほぼすべての小詞に関わるから、それら[の小詞]をここで一度にまとめてしまった方がよいだろう。

第一に、「哉」tsai はその用法が大変に多様であり、ほとんどいつも自らを他の小詞と結びつけている。1.「何」ho と結合する[16]。例えば「何哉」ho tsai“なぜそのようであるのか？”「其故何哉」[17]ki kou ho tsai“どんな原因によってこのようであるのか？”「復何疑哉」[18]fou ho y tsai“何の疑問がまだ残っているというのか？”「何有於我哉」[19]ho yeou yu ngo tsai“これが私にとって何だというのか？”2.「豈」ki と[結びつく]。例えば「豈有加於此哉」[20]ki yeou kia yu tsee tsai“これにさらに加えられるものは何なのか？”[21]「豈二子之所以能及哉」[22]ki ell tsee tchi so y neng ki tsai“どうしてあの我が弟子二人がこの程度まで達することができようか？”「豈不

---

[10] 『書経』盤庚など。

[11] 『中庸』第三十一章。

[12] 『中庸』第二十七章。

[13] 英訳本は「甚」を「其」に作る。

[14] 欧陽修「本論」下。なお前後は「然後知荀卿之説謬焉。甚矣、人之性善也」とあってプレマールの引用では句読がやや不自然である。

[15] 庾信「白帝雲門舞」。

[16] 英訳本は以下の九種の「哉」の用法を箇条書きにせずに訳出している。

[17] 欧陽修「朋党論」。

[18] 『抱朴子』に引く曹植「釈疑論」。

[19] 『論語』述而。

[20] 『中庸』序。ただし本来は「豈有以加於此哉」。

[21] 英訳本ではここに「「豈」ki と[結びつく]。例えば」という文が入る。

[22] 『荘子』徐無鬼・疏。ただし本来は「豈二子之所能耶」。

深可惜哉」[23]ki pou chin ko si tsai“他にもっと悲しいことがあろうか？”3.「奚」hi[と結びつく]。例えば「奚可哉」[24]hi ko tsai“そのようにはなりえない”“それは証明されているか？”。Mong-tsee<孟子>は常に hi<奚>と tsai<哉>を結びつける[25]。4.「烏」ou と[結びつく]。例えば「烏足道哉」[26]ou tsou tao tsai“そのことについて言及する価値があるのか？”5.「安」ngan と[結びつく]。例えば「我之心安得而不悲哉」[27]ngo tchi sin ngan te ell pou pai(sic) tsai“私の心はどうすれば悲しみから安らぐのだろうか？”「則所謂徳性者果安在哉」[28]tse so ouei te sing tche ko ngan tsai tsai“このような状況にあって、生来の徳と呼ばれるものはどこへ行ってしまったのか？”「安在」ngan tsai は“どこにあるのか？”という意味であることを注記せよ。また「在哉」は音が近い[ので選ばれている]。「所謂徳性者」は動詞「在」tsai の主格名詞[句]であり、「果」ko は“本当に”である。6.「乎哉」は文末に置かれる。「為仁由己而由人乎哉」[29]ouei gin yeou ki, ell yeou gin hou tsai“私が仁愛を有するようになるのは私自身のみによるのか、それとも他人によっても可能なのか？[30]”ここで「而」ell は決して[フレーズを]結合するのではなく、むしろ分割する。つまり[文が]“これは私によるのか、それとも他人によるのか”という[選択の]意味であること、そしてこの[文]が疑問文であることを示すのだ[31]。「仁遠乎哉」[32]gin yuen hou tsai“仁愛は我々からかくも遠ざかってしまっているのか？”「君子多乎哉」[33]kiun tsee to hou tsai“賢者はかくも多くのことを要求するというのか？”7.「也哉」も文末[に置かれる]。「何必盡求人知也哉」[34]ho pi tsin kieou gin tchi ye tsai“他人が君のことを知るようかくも労力を費やすのが何の役に立つのか？”と、孔子はこのように[言った]。8.「與鄙夫可與事君也與哉」[35]yu pi fou k‘o yu ssee kiun ye yu tsai“つまらぬ男が王に仕えられることを私は望んでいるというのか？”私が誤っていなければ、Ngheou-yang-sieou<欧陽修>がそう[言ったのである]。

---

[23] 「豈不大可惜」ならば『朱子語類』巻第八十四、「豈不可惜」ならば同書巻第一百十八に見える。

[24] 『孟子』尽心上。

[25] 実際は「奚～哉」の構文は 4 例のみ（注 24 の例および「是奚足哉」尽心下、「此惟救死而恐不贍，奚暇治禮義哉」梁恵王上、「如此則與禽獸奚擇哉」離婁下）。

[26] 欧陽修「国学試策三道」第二道。

[27] 出典不詳。

[28] 王洪先「書龍華会語後」。

[29] 『論語』顔淵。

[30] 英訳本は「私が慈善を行う方法を教えるのは私のためなのか、他人のためなのか？」と訳す。「慈善(benevolence)」は英訳本における「仁」の訳語の一つである。

[31] つまりプレマールによればここの「而」は順接の接続詞なのではなく選言的な接続詞であるということになる。

[32] 『論語』述而。

[33] 『論語』子罕。

[34] 出典不詳。

[35] 『論語』陽貨。従って後文にある、欧陽修の言であるという記述は誤り。

[以下のことを]注記せよ。すなわち「可與」“彼らは～を譲歩することができる”において「與」は動詞であり、「與鄙夫」“つまらぬ男に”はその目的語であり、[その]「與」は[文法的な機能の面で]「於」に同じい。次いで「也與哉」の 3 字は連続する小詞であり、「與」は単に音調のためだけに置かれている。9.「不亦」が[「哉」に]先行する。例えば「不亦宜哉」[36]pou y y tsai“これは等しくかつ正しいのではないか？”しかしより一般的には「乎」が用いられる。例えば「不亦樂乎」[37]“その中にすら楽しみがあるのではないか？”

第二に、「哉」なしに「何」[が使われることがある]。例えば「何敢死」[38]“どうして私が死に抗うだろうか？”「如何其知也」[39]yu(sic) ho ki tchi ye“どうしたら彼が聡明だと言えるのか？[40]”「於從政乎何有」[41]yu tsoung tching hou ho yeou“なぜ私は国家を治めることができないのか？”「於從政」は動詞「有」の目的語であることを注記せよ。「何有」は「何難之有哉」[42]“一体どんな困難があるというのか？”に同じである。「乎」はここでは先述の「於是乎」のように小詞「於」と結びつく。「如之何其廢之」[43]ju tchi ho ki fei tchi“これはそのように滅びるというのか？”「如之」は「何」と結合しなくともよく“このように”を意味する。ここで、もし「何廢之」と言えば、その意味は“なぜこれを君は滅ぼすのか？”であるから、[「如之」は]「其」と呼応する。だが、この小さな差異を[ラテン語の]言葉ではほとんど伝えることができない。「何也」または「何邪」“なぜ？”。Tchouang-tsee<荘子>には「何舁」ho yu があり、ほとんど同じ意味である[44]。「如何」も同様だが、もし何か名詞が挿入されれば意味は別のものになる。例えば「如予何」[45]ju yu ho“彼らは私にどんな悪いことをすることができるのか？[46]”「其如命何」[47]“これは神命を妨げたり変えたりできるというのか？”「如正人何」[48]“人間を正しくする上でこれはどうか？”「正」は動詞であり、「人」がその目的語であることを注記せ

---

36 「不亦宜乎」の形ならば『孟子』、『韓非子』、『史記』などに豊富に見える。また「豈不宜哉」の形ならば『呂氏春秋』不苟論などに見える。

37 『論語』学而。なおここにローマ字標音はない。

38 『論語』先進。なおここにローマ字標音はない。

39 『論語』公冶長。

40 英訳本では「どうして彼が知ることができるだろうか」と訳す。

41 『論語』雍也。

42 『論語』子路。

43 『論語』微子。

44 『荘子』にこの語形は見えない。音の近い「何與」ならば山木篇に見える。

45 『論語』述而・子罕など。

46 英訳本は主語を「彼ら」ではなく「それ」とする。

47 『論語』憲問。

48 『論語』子路。ここにローマ字標音はない。

よ。「何必改作」[49]ho pi kai tso“なぜこの習慣を変えねばならないのか？”「何徳之衰」[50]ho te tchi choai“ああ、徳は何と無力であることか！”ここで[「何」]は感歎[を表し]、疑問[の意味]ではない。

第三に、「豈」が「哉」なしで[使われる]。「豈惟口腹有饑渇之害」[51]ki ouei keou fou yeou ki ko tchi hai“人々は単に渇しているだけなのか？単に空腹であるだけなのか？”「豈有此理」ki yeou tsee li あるいは「[豈有]斯理」ssee li は「豈敢」ki kan とほとんど同じで、礼儀正しくこのように言うのである。人々は[文]末に上手く「乎」hou を加える。例えば「其然豈其然乎」[52]ki gen ki ki gen hou“そのようであるのか。本当にそれはそのようであるのだろうか？”「豈其」は上述の「在哉」のよう[な音感上の理由から選ばれていることを]注記せよ。

第四に、「哉」なしで「奚」[を使うことがある]。例えば「如奚不曰」[53]ju hi pou yue“なぜ君は言わなかったのか？”ここで「如」は二人称の代名詞である。「雖多亦奚以為」[54]soui to y hi y ouei“物はかくも豊富にあるとしても、人々は真の使い方を知っているのだろうか？”「亦」y は「而」ell の用法と同じく、「雖」と呼応する。「亦奚以」y hi y は「既其及也」ki ki ki ye のように[似たような音が続いても]、ためらうことも回避することも全く不要な、生き生きとした[読]音なのである。

第五に、「惡」ou は、人々が優雅に著したところのあらゆる作品において用いられる。「惡得而禁之」[55]ou te ell kin tchi“どのようにして我々はこれを阻もうか？”[以下のことを]注記せよ。「惡禁之」はほとんどありえない[形である]。「惡乎禁之」だとわずかに意味が変わってしまう。「惡得禁之」ならば[同じ]意味を維持できるだろう。しかし、もしも「而」ell が加われば文はずっと柔かく優雅である。「惡能當之」[56]ou neng tang tchi“それは私の力を超えている。どのようにしてこれを止めようか？”。[以下のように]「乎」hou がうまく加えられている[ことがある]。例えば「君子去仁惡乎成名」[57]kiun tsee kiu gin ou hou tching ming“もし賢者が仁愛を放棄したならば、どのようにして自らの賢者という名を全うするのか？”「天下惡乎定」[58]tien hia ou hou ting[sic]“誰が世界の平穏を取り戻すのか？”「吾惡乎知之」[59]ngou ou hou tchi

---

49 『論語』先進。

50 『論語』微子。または『荘子』人間世。

51 『孟子』尽心上。

52 『論語』憲問。

53 『論語』述而。ただし「如」は本来は「女」。

54 『論語』子路。

55 『孟子』尽心上。

56 「惡能當言」の形であれば『呂氏春秋』有始覚に見える。

57 『論語』里仁。

58 『孟子』梁恵王上。

59 『荘子』斉物論。

tchi“私がこのことをどうして知りえただろうか？”Tchouang-tsee<荘子>は「道」táo“至高の道理”について考えてこう述べた、「果惡乎在」[60]ko ou hou tsai“それはどこにあって呼応しているのか？”、「無乎不在」ou hou pou tsai“それはあらゆるところにある”と。これらすべての例において、「乎」は先述の「於」と同じ意味を持っていることが分かる。

第六に、「曷」ho は「何」に同じい。Y-king<易経>において「曷之用」[61]ho tchi yong“これらは一体どんな使い方ができるのか？”「之用」は「用之」の倒置である。

第七に、「胡」hou も同じ[疑問の]意味を持つ。「吾子胡不立乎」[62]ngou tsee hou pou li hou“なぜ君は何の地位も引き継がないのか？[63]”彼[湯王]は彼[贅光]に「吾子」と呼びかけている。

第八に、「盍」ho[sic]“なぜ～ないのか？”[がある]。「盍各言志」[64]ho ko yen tchi“なぜ君らは心の裡を私に打ち明けないのか？”孔子は自らの弟子たちに[そう]尋ねた。「志」tchi は“希望”“意思”“心の内にあること”である。「害」ho[sic][65]も[「盍」と]ほとんど同じ意味である。Chu-king<書経>において「害不違」[66]“なぜ彼は神意に逆らわないのか？”[また] Chi-king<詩経>においては「不」pou を加えず、「害瀚」[67]ho han“なぜ私は自分の服を洗わないのか？”[のように言う]。しかし、これらは極めて稀である。

第九に、「孰」chou“誰？”がある。例えば「孰為好○學」[68]chou ouei hao hio“君らのうち誰が徳を学ぶことを好むか？”「百姓足君孰與不足」[69]pe sing tsou, kiun chou yu pou tsou“人民が何も困っていなければ、王に何か欠けているということがありえようか？”「孰大於是」[70]“何かもっと大きいものはあるか？”「管子而知禮孰不知禮」[71]“もし Kouan-tsee<管子>が儀礼を知っていると言うのならば、誰のことを儀礼を知らない者と言うことができようか？”

第十に、「誰」choui[がある]。例えば「作亭者誰」[72]tso ting tche choui“この庭を造ったのは

---

[60] 次の引用とともに『荘子』天下。

[61] 『易経』損。

[62] 『荘子』讓王。

[63] 英訳本は「君はなぜ名声を求めないのか？」と訳す。

[64] 『論語』公冶長。

[65] 英訳本は hoh と標音する。

[66] 『書経』大誥。原文は「王害不違卜」なので“神意に逆らう”というラテン語文は適切であるが、「卜」を省略しているので、なぜ神意と訳しているのか読者には理解できないだろう。なおここにローマ字標音はない。

[67] 『詩経』国風・周南。

[68] 『論語』先進。「好」の右上には去声に読むことを示す圏点がある。英訳本にもある。

[69] 『論語』顔淵。

[70] 『孟子』尽心上。なおここにローマ字標音はない。

[71] 『論語』八佾。原文は「管氏」。なおここにローマ字標音はない。

[72] 欧陽修「酔翁亭記」。

誰か？”「是誰之過與」[73]“それは誰の過ちなのか？”「誰能出不由戸」[74]choui neng tchu pou yeou hou“門から出ることなく[外へ]出ることができるのは誰か？”「降祥降殃者誰」[75]kiang tsiang kiang yang tche choui“恩寵と罰を決定し生じさせるかの者は誰か？”「孰」と「誰」choui は小詞というよりはむしろ代名詞であるが、[ここで]簡潔に言及したのである。

また、あなたがたは小詞「乎」hou、「耶」あるいは「邪」ye、「歟」yu、「焉」yen について解説したことを記憶しているだろうが、それらを疑問に用いることもあると私は忠告した。さらに、これらから中国語がいかに豊かであるか、そして[我々の言語とは]異なるやり方で何と豊かに思いを表現するかを知ることになるだろう。

第 18 節 文末の小詞について

私はここに「也」ye、「乎」hou、「耶」あるいは「邪」ye、「與」yu、「耳」ell、「焉」yen、「哉」tsai[の各小節を]入れることはない。というのは、これらについてはすでにそれぞれの小節で十分に述べたからだ[76]。

小詞「己」[sic]は「而」に先行される。例えば「則一而己[sic]」[77]tse y ell y“それはただ一つである”。[「已」の]例は手近なところにあまねくある。あるいは、「也」に先行されることもある。例えば「可謂仁方也己[sic]」[78]ko ouei gin fang ye y“これはよく考えられた仁愛の方策と言える[79]”。「可謂好○學也己[sic]」[80]ko ouei hao hio ye y“彼らは全身全霊で徳に身を捧げていると言える[81]”。「末由也己[sic]」[82]“解決策がない”“出口がない”。「不足觀也己[sic]」[83]pou tsou kouan ye y“これは検討するに値しない”。「末之也己[sic]」[84]“そこへ行ってはならない”。

---

[73] 『論語』季氏。なおここにローマ字標音はない。

[74] 『論語』雍也。

[75] 「作善降之百祥，作不善降之百殃」の形であれば『書経』伊訓に見える。

[76] 英訳本では「～述べたので、」とコンマに終わり、まだ文が続くかのごとくである。もしかすると脱文があるのかもしれない。

[77] 『朱子語類』巻九十四。

[78] 『論語』雍也。ただし本文は「可謂仁之方也已」。

[79] 英訳本は「これが仁愛の規則だと言えるのか？」と訳す。

[80] 『論語』学而。「好」の右上に去声に読むことを示す圏点がある。英訳本にもある。

[81] 英訳本では主語が「彼」と単数である。

[82] 『論語』子罕。なおここにローマ字標音はない。また英訳本は「末」を「未」に作る。

[83] 『論語』泰伯。

[84] 『論語』陽貨。なおここにローマ字標音はない。また英訳本は「末」を「未」に作る。

小詞「夫」fou“〜のみ”[もある]。例えば「善夫」[85]chen fou は「善也」[86]“まさにその通り”と同じである。「誠之不可揜如此夫」[87]tching tchi pou ko yen ju tsee fou“彼はずっと長いこと最高の誠意を隠すことができなかった”。あるいは「矣」が[「夫」に]先行して[使われることがある]。例えば「有矣夫」[88]“ああ！それはあまりに頻繁に生じている！”「亡之命矣夫」[89]vang tchi ming y fou“君は死んでしまう、そう[天から]決定され命令されたのだ”。あるいは「也」が[「夫」に]先行する。例えば「莫我知也夫」[90]mo ngo tchi ye fou“ああ！誰も私のことを知らない！”「皆此意也夫」[91]kiai tsee y ye fou“すべてにおいて意味は同じだ”。あるいは[「夫」を文の]先頭に置くこともある。例えば「夫能高其目而下其耳者匪天也夫」[92]fou neng kao ki mou ell hia ki ell tche, fei tien ye fou“その目を高くし、その耳を下げることのできる者は、天ではないのか？”つまり“天は賤しい人々のことを聞き、高貴な人々のこともよく知っている”[ということだ]。

小詞「矣」y は単なる語末の語である。例は手近なところにたくさんある。「則近道矣」[93]tse kin tao y“まっすぐな道を行けば彼はそう遠くないところにいるだろう”。「吾不知之矣」[94]ngou pou tchi tchi y“私はそんな人は知らない”。[また「矣」は]小詞「者」と呼応する。例えば「惡而知其美者」ou ell tchi ki moei tche, 「鮮矣」[95]sien y“人々が憎む相手の善い点を見抜けるような人はまことに少ない”。ここでは[「矣」があったところで]何も説明されないが、そのまま[「矣」が]付け加えられている。そしてまさにこのことによって「矣」は「也」とは[ニュアンスが]異なるのである。「矣」y の後ろに「乎」か「夫」が置かれる[ことがある]。例えば「鬼神之為徳其盛矣乎[96]」しかしすでに我々はこの形式の文を見ている[ので訳文は挙げない][97]「己[sic]矣夫」が文頭あるいは文末に置かれる。「吾己[sic]矣夫」[98] “ああ、私は失敗してしまった

---

[85] 『論語』子路。

[86] 『論語』衛霊公、八佾。

[87] 『中庸』十六章。

[88] 『論語』憲問、子罕。なおここにローマ字標音はない。

[89] 『論語』雍也。

[90] 『論語』憲問。

[91] 「夫」がない形ならば『朱子語類』巻五十二、五十九などに見える。

[92] 『法言』問明。

[93] 『大学』経一章。

[94] 『論語』泰伯。

[95] 『大学』伝八章。ただし原文は「惡而知其美者天下鮮矣」。

[96] 『中庸』十六章。なおここにローマ字標音はない。

[97] 英訳本では代わりに「精霊の徳はどれほど崇高であるのか？」という訳文が与えられている。

[98] 『論語』子罕。なおここにローマ字標音はない。

[99]”[のように]。

小詞「兮」hi はよく Chi-king<詩経>、Lao-tsee<老子>および詩文に現れる。例えば「彼美人兮西方之人兮」[100]pi moei gin hi, si fang tchi gin hi“他の人たちよりも美しいあの人、彼は西の方からやってきた”。Chi-king<詩経>のこの箇所について、注釈者たちは以下のように言う。すなわち、[詩の]作者はその思うところを表しきれず、それゆえ強い語調を持つ小詞「兮」hi を加えたのである、と。[こうした詩は]「歌辭」つまり“普通の言葉を用いる歌の歌声”と呼ばれる。

「云」yun という字は動詞“話す”“言う”を意味するが、Chi-king<詩経>においては疑問を表す時に文頭に置かれる小詞である。例えば「云如之何」[101]yun ju tchi ho“どのように？”「云誰之思」[102]yun choui tchi ssee“君は誰のことを考えているのか？”「云胡不喜」[103]yun hou pou hi または「云胡不樂」[104]yun ho pou lo“どうして私は楽しくないのか”“どうして君は喜ばないのか？”「言」yen という字はほぼ「云」と同じ意味で Chi-king<詩経>に出てくる[105]。「言采其桑」[106]yen tsai ki sang“桑を植えよう”。「言采其蝱」[107]yen tsai ki meng“悲しみを追いやる花を集めよう[108]”。しかし「云」と「言」についての解釈はこれだけで誤りがないかといえば、それは定かではない。「云」は話を終わらせる[語]でもあるのだ。「以俟君子云」[109]y ssee kiun tsee yun“そして賢い読書人を待って”[のように]。

すべての議論の結論

私がこの章全体で説明を試みた小詞の中にあって、あるものは単独で描写され、あるものは互いに呼応し、またあるものは[文の]多彩さと優雅さのために[使われ]、さらにあるものは意味が明確になるために[使われる]といったものが多い、ということに気づくのは容易になっただろう。私は以下においてここまでの要約を記そう。ここでは[文中における]ある位置を要求し

---

[99] 英訳本は「ああ！私は終わりだ！」と訳す。

[100] 『詩経』国風・邶風。

[101] 『詩経』小雅。

[102] 『詩経』国風・鄘風。

[103] 『詩経』国風・鄭風。

[104] 「云何不樂」の形ならば『詩経』唐風、小雅に見える。

[105] ここに挙げられている「言」の例は疑問を表すという「云」の用法とは同じではないので、プレマールの解説は正確さを欠く。

[106] 『詩経』国風・魏風。

[107] 『詩経』国風・鄘風。

[108] 英訳本は「クリスマスローズを集めよう」と訳す。

[109] 「云」がなければ『論語』先進。

たり、ある用法を持っていたり、意味を強めたりする[小詞について]自ら考える上で有用なことを略述し、明らかにしていこう。

小詞の目録[110]

矣	如	云	惡	然	然	矣	也	者	者
夫。	何。	爾。	乎。	且。	乎。	哉。	哉。	邪。	也。
云	何	焉	嗚	然	然	己[sic]	也	者	也
乎。	哉。	耳。	呼。	則。	矣。	矣。	與。	哉。	者。
云	何	且	乎	若	然	己[sic]	也	焉	者
何。	矣。	如。	耳。	然。	亦。	乎。	己[sic]	哉。	耶。
	矣	何	云	庶	然	乎	也	也	者
	乎。	如。	耳。	乎。	而。	哉。	耶。	夫。	乎。

「已矣夫」[111]や「已[sic]矣乎」[112]のように三字[もの小詞]が一度に結びつくことは珍しくない。しかしこの時「已」は、[「已矣夫」や「已[sic]矣乎」が]“ああ！もう十分だ”“もう止めよ”という意味になるように、意味上動詞“進む”ではなく“留まる”と考えた方がよい。そして「而已矣」[113][における「已」]もおそらく同様である。しかし以下においても明らかに三字[の虚詞の連続]である。つまり「而矣也」「也與哉」「何以哉」「庶乎哉」「如得人…焉爾乎」[114]ju te gin yen ell hou“あなた方は人間の威厳を与えられたのではないか？”[などである]。「如」は二人称代名詞、「爾」は「耳」と同じ[意味の]小詞である。「盡心焉耳矣」[115]“心の底から”[のように]。

むろん[小詞の連続には]四字あると考える人もいる。例えば「吾未之何也已矣」[116]“たしかに私はこの先何をするべきか分からない”。「日月至焉而已矣」[117]“一日か一月の間人々は儀礼

---

[110] 以下の表は実際には文頭や文末に来る虚詞の二字の組み合わせを挙げている。また英訳本では表の形ではなく、本文中に表中の虚詞を列挙している。

[111] 『論語』子罕。

[112] 『論語』衛霊公、公冶長。

[113] 『論語』雍也、顔淵など。

[114] 『朱子語類』巻第三十二。なお本来は「如」ではなく「女」。また「…」で示す省略は原文にはなく「女得人焉爾乎」である。

[115] 『孟子』梁恵王上。なおここにローマ字標音はない。

[116] 『論語』衛霊公。なおここにローマ字標音はない。

[117] 『論語』雍也。なおここにローマ字標音はない。

通りにやり、その後はやめる”。しかし最初の例文において、「何」はそれ以後の三字と結びつけられなくともよい。そして二つめの文における「焉」は[それに]先行する「至」と関連する。すでに述べたように「已」は動詞と思われるから、これは次[の「矣」]に属するわけではないということを[注記に]加えよ。「己[sic]乎己[sic]乎」[118]あるいは「己[sic]而己[sic]而」[119]“おお、もう止めよ”。これらは「己[sic]乎」や「己[sic]而」を二度繰り返したものに他ならない。

中国語の文を語から語へラテン語に移す必要があるとは、私は考えなかった。なぜなら、そんなことは全く役に立たないし、むしろしばしば直ちに言い表せなく[120]なってしまう。したがって私は[逐語訳にこだわらず]正しい[中国語の]意味を十分に伝えたのだが、このこと自体が、[読者の]おのおのが中国の文字から自力でその意味を探し出そうと試みる上で、道を明らかにしようと私も一度ならず行ったように、大きく役立つのである。

以下の二つの章では、小詞について多くは付け加えない。しかし私が読み取るところの、中国の[文学の]花園の優美なる文体を私は教えるだろう。ヨーロッパの言語に[中国語の]魅力を味わわせるためだけではなく、もし彼ら[ヨーロッパ人]が望むならば、上品かつ優美に中国語でものを書けるようになるために。

第三章 中国のさまざまな文体と最高の文章について

全世界の人々の伝えるところでは、野蛮で粗野な人々が次第に温和になっていき、言葉の快い美しさや洗練された弁舌の優美さが会話の田舎ぶりをも徐々に変えていく、というのは我々が読んで知るところであるが、それは中国の人々にも起こったと、中国の歴史に信を置くことができると主張する者はみな認めている。たしかにそこから、中国人はその点において他の人々より幸運ではなかったことが分かるが、しかしその帝国の揺籃期から、彼らは驚嘆すべき技巧によって形成された象形文字を有し、「經」king と呼ばれる文書群をも保持していたのだ。時間的な古さだけではなく、神秘的な教義の不思議さや、簡潔な文体の力によって、そうした議論の美に近づくことができる者が後の時代の文人の中に誰も現れなかったほど、それらは素晴らしいのである。しかし、中国人は誰も否定しないが、かつて主張されたように、中国人が自らこのような著作を著したのか、それとも彼らはより偉大な人々からそれらを与えられて受け継いだのかは議論のあるところだ[121]。しかし本書のこの箇所では[このことについては論

---

[118] 『左傳』昭公伝十二年。

[119] 『論語』微子。

[120] 原文は大文字で ADUNATON（名状不能）。ここだけ大文字なので訳文では傍点として処理した。

[121] 本稿で「偉大な」と訳した語は majoribus. 英訳本は「もっと昔の」とするが、本稿ではプレマールの考えを考慮して「偉大な」と訳した。major にはどちらの意味もある。索隠派のプレマールは、

じ]ないから、私は学識と賢明さとを持つ人に[この問題についての]判断をゆだね、今ある章を三つの節に分かつ。すなわち第一にさまざまな文体に等級を与える。第二に文体に関するさまざまな規則を伝える。第三に、[前節で]与えられたところの規則が、選ばれた例文によって眼前に示されるだろう。

第一節　各種文体の等級が割り振られる

我々は、中国のさまざまな書物の分類について序章においてすでに述べたことを思い起こさなければならない。しかし、そこで与えられた注記は文体に対するものというよりは、むしろ書物そのものに対するものであった。そこで、それぞれの固有の等級に属する文体を区別するのは非常に骨の折れることであるが、今やそれを正しく行うべきであるよう私には思われる。

第一に、古代の文体。「古文」kou ven は、文体の荘重さと威厳において他のすべて[の文体]よりはるかに勝り、ごくわずかな[数の]文字に驚嘆すべき意味[の豊かさ]を含んでいる。もしあなたが語を吟味するならば、何[の言語]よりも簡潔で優れている[ことに気づく]し、もしあなたが意味に注意を向けるならば、何[の言語]よりも明確で洗練されている[とわかるだろう]。この偉大で最高の文体の頂を、さまざまな古代の書物に散在して今なお読まれる数多くの荘重な文章が目指しており、それゆえあたかも[中国文学の]宝物のごとく、それらは入念かつ熱心に集められなければならないのである。

第二に、3 種類、すなわち「易」y、「詩」chi、「書」chu 以外は私は[本書では]区別しないが、そんな真正の「經」king の後には[以下のものが]来る。すなわち 1.Tchong-yong<中庸>。しかしその文体はあまりに装飾的であろう。2.Ta hio<大学>。これは Tseng tsee<曾子>が註釈によって[経を]説明した書である。3.Lun-yu<論語>。これはばらばらの文章から成り、よく使われる小詞がどこにもない[122]。4.Li-ki<礼記>。体系的ではないが、最高の文体の特色を示す章節と段落から[内容が]選ばれている。5.Tao-te king<道徳経>。その文体はきわめて古代的であり、Sse-ma-kouang<司馬光>[123]はその文体の簡潔さゆえに king<経>よりも高く評価して疑わなかっ

中国人がかくも優れた古典を有しているのは、旧約聖書の大洪水以前に東遷したイスラエルの支族からそれらを受け継いだためであると考えている。この時代のヨーロッパ人にとって、キリスト教を離れた文明というものは考えられなかったし、そのような憶測はプレマールが中国古典を研究する強い動機ともなった。

[122] ラテン語原文は et nullibi particulae sunt frequentiores. 本稿で明らかなように、文語篇にみえる虚詞の例文は論語から多く採られているにもかかわらず、プレマールがこのように述べているのは不可解と言わざるを得ない。一方で英訳本は「よく使われる小詞がたくさんある」と、原文とは逆の意味に訳す。

[123] 司馬遷の誤。次の注を参照。

た。すなわち「五經不如老子之約也」[124]と。[しかしこの]賞賛はゆきすぎであり誤りである。Chi-king<詩経>と Chu-king<書経>については言うに及ばず、Y-king<易経>がその象徴によってはるかに簡潔に、有益に、上品に言わなかったようなことを、この小さい書物が何か言っているというのだろうか？6.「楚辞」tsou tsee と呼ばれる詩である。初春の花の香りを快く享受し、またすべての美しい詩の優美さを味わうことができる。7.「山海経」chan-hai-king はまるで泉のように[そこから]詩情と虚構のにおいのするものすべてをくみ出す。そのようであるから、Chan-hai-king<山海経>なくして中国における詩はほとんどなくなってしまうほどだ。

第三部には以下の著述家たちが入らねばならない。1.「荘子」Tchouang-tsee、2.「列子」Lie-tsee、3.「關尹子」kouan-yun[sic]-tsee、4.「荀子」Sun-tsee、5.「孟子」Mong-tsee、6.「楊子」yang-tsee、7.「淮南子」hoai-nan-tsee、8.「呂氏」[125]Liu-tsee. 優雅な中国語を学ぼうと望む人はこれらをすべて所有して研究すべきである。私はこれらの中に「孟子」Mong-tsee を置いたが、単に文体のみに留意したからであり、この Mong-tsee が現代の中国人によって、孔子および Tchong-yong<中庸>なる書を著したとされるその孫とほぼ同じ位置を与えられているのは疑いない、ということは顧慮していない。たとえ本質的にどれだけ饒舌であろうとも、Mong-tsee<孟子>は大変に良く書かれている。しかし Sun-tsee<荀子>と Yang-tsee<揚子>は彼に劣っておらず、また私の感覚では Tchouang-tsee<荘子>と Lie-tsee<列子>は彼に勝っている。ここに[以下を]加える。1.「左氏」Tso chi。その双子の作品すなわち「左傳」tso tchouan と「國語」koue-yu は[書中の]至る所に現れる古代の文体によって大きく賞賛されている。2.「司馬遷」Sse-ma-tsien は才能があり優雅な[文を残した]著述家の中で、Tchoang-tsee<荘子>や Tso-chi<左氏>のように「才子」tsai-tsee と呼ばれるが、[そう呼ばれるのは]五人といない。[司馬遷は]小詞を使うことが非常に稀だが、[それは]装飾過剰な文章の花を歴史の重みゆえに刈り込まなければならなかったからだ。

第四に、最後の等級には、後の諸王朝で栄え、優雅な文章によって以後のすべての人々より大きく勝るところの、まことに数多くの著述家が来る。彼らは以下のとおりである。1.「韓愈」Han-yu は「唐」tang の王朝で活躍した。2.「歐陽修」Ngheou-yang-sieou は批判の正確さと文章の純粋さとどちらをより評価すべきか、あなたには分からないだろう。[それほど共に優れているということだ]。3.「蘇東坡」Sou-tong-po、4.「朱熹」Tchu-hi は極めて純粋に、優雅な文体で書いた。他にもまことに多くの著述家を加えることができる。その作品群は Kang-hi<康熙>皇帝の命によって「古文淵鑑」kou ven yuen kien という一つの書物にまとめられている。5.[古文の]注釈者たちの中にも、優れて洗練されて書いた人々が見いだされる。6.詩人たちの中では

---

[124] 『法言』寡見。原文は「或問、司馬子長有言曰、五經不如老子之約也」であり、司馬遷の言葉として用いられていることが分かる。なおここにローマ字標音とラテン語訳はない。

[125] 英訳本では漢字を欠く。

「杜工部」Tou-kong-pou と「李太白」Li-tai-pe が最も賞賛される。

私は「世文」chi-ven については触れない[126]。[これは]中国の文人がその全生涯を惨めに費やす修辞的文章のことをいう。「宋」song 王朝で王の大臣であった「王安石」vang-ngan-che に始まり、彼は学者の試験のためにそれを重視するようにした。何物であれ、これより空虚なものはない。[それは]柔らかい音で快く耳を打つが何の実も結ぶことはなく、[文飾の]花は目を満足させるがその知性は貧弱である。議論はありふれた虚飾に満ち、文飾は豊かだが意味は空虚なのだ。[中国の文章の]の美しいところは、才能ある[文章の]味わいが直ちに感じられるように中国[の文学]の魅力として担わせよう。しかし消え去るべき彼らの花に精神と生命を与えるのに役立つような、真の哲学や深遠な文学についていえば、[中国の文章にはそれが]十分に備わっていないのである。

第二節　一般的な規則が文体に従って与えられる

きわめて上手にかつ優雅に、「楊子」Yang-tsee は文体について三つの段階[127]を与えている。第一に“言葉よりも意味に大きな力が加わると、”「事勝辭則伉」[128]ssee ching tsee, tse kang“文体は硬く粗野になる”。第二に、“話題となっていることへの注意が、修飾する言葉の魅力よりも少なければ、”「辭勝事則賦」tsee ching ssee, tse fou“文体は詩的になり過度に優雅なものとなる”。第三に、“文章の優雅さが意味の重さを超えず、美しい意味が美しい言葉で表現される時、”「事辭稱則經」ssee tsee tching, tse king“文体は最高のものとなり、「経」king なる諸書にふさわしくなる”。ここで、三つのフレーズは文字の種類が 8 種を越えぬよう驚くべき技巧で結び合わされ、各[フレーズ]は 5 字より成っている。同じ趣旨のことを Ngheou-yang-sieou<欧陽修>も言っている。すなわち“言葉は常に物事を伝えるように用いられる”「言以載事」[129]、“そしてその魅力によって言葉が[目的に]届くよう洗練を求める”「而文以飾言」。“何事も真実と実質を伴って言われ、見事にかつ優雅に表現されるならば”「事信言文」、“そのとき文章は king<経>なる諸書の文体からさして遠くないところにあるのだ”「則去經不遠」と。フレーズは全部で四つあるが、一つめと三つめは四字、二つめと四つめは五字である。そして[これらの内]「事信言文」ssee sin yen ven の四字こそが、最高の文体についてのすべてを言い表しているといえる。

---

[126] 科挙応試の文体を指すように見えるので「時文」のことか。「時文」と「世文」はプレマールの体系では同じローマ字標音になる（声調表示を除く）。

[127] 英訳本では「と等級」という訳語が加わる。

[128] 『法言』吾子。以下の二つのフレーズも同じ箇所を出典とする。

[129] 欧陽修「代人上王枢密求先集序書」。以下の三つのフレーズも同じ箇所を出典とする。

従って、以下のようであるほど望ましいことはない[130]。すなわち、中国の文章が真の実体と豊かな活気を持ち、各部分がお互い適切に呼応していること。また何もねじ曲がったり無気力だったりする姿をさらさず、すべてがしかるべき箇所に、よき光をもって配され、それゆえに驚くべき一体感をもって了解され、共通の絆で結ばれながらも[字数の]多様性を生じること。そして連続する議論にあってすべてのフレーズ、それどころか[その中の]文字自身[の種類]さえ、フレーズがフレーズを、文字が文字を支え助け合ように、多様でなければならない。ここで、同じ字が二度繰り返されたり、隣の字とともに結び合わされたりすることや、小詞が崩れそうな文章を力強い支柱のように支えることは、大変によくあることなのだ。

他のフレーズがより長い[字数]であったとしても、ちょうどフランスの詩歌において自由詩あるいは混成詩と呼ばれる詩型のように、それらの間は完全に調和していなければならず、[語の]組み合わせが長くなるほど詩の楽しみは短くなってしまう。しかし一方で、[1フレーズ中の字数が]かくも多様な中で、規則に従うべきことをあなたが知らない限り、[あなたの作る]韻文[131]は馬鹿げて粗野な形になってしまうだろう。4字以上から成る中国語のフレーズについて、全体的には上のように言うことができる。しかしもしそうした[4字の]フレーズがずっと続けば[単調すぎて]不快さが生じるから、文字は塩によるように[字数の]多様性によって味付けされなければならない。従って、字[数]の他の選択肢として3種類すなわち5字、6字、7字[のフレーズが]挿入されなければならないのだ。しかし、単一の種類[=字数]のみから成るフレーズ群が魅力的である、などということは極めて稀にしか起こらないことを大いに注記すべきである。ゆえに、[同じ字数のフレーズが]続くのか、または[字数を]変えるのか、あるいは別に何字でもよいのか、用法が徐々に教えるところに応じて、フレーズを配していかなければならない。

さらに、優雅な作者はしばしば自らの著作を、3つ或いは4つの内容をしっかりと心に示すよう組み立て、ついでそれらを新しい光の下で、心を奪い感歎を呼び起こすほどに快く配置するのである。

キケロー自身が述べるように、聴衆皆が叫んだという彼の輝かしい一節は以下のようである。[それは]親殺しの罰として生きながら深く獣皮に縫い付け[る場面であった][132]。[マルク

---

[130] 英訳本ではこの段落の改行がない。

[131] 原文 versus. 一般に韻文の詩行を言うが、今ここでは散文のことを論じているのでやや不自然。英訳本も verse(韻文)と訳す。

[132] 以下はキケロー『セクストゥス・ロスキウス・アメリーヌス弁護(Oratio pro Sexto Roscio Amerino)』XXVI. キケローは父親殺しの罪で財産を没収され、さらに革袋に生きたまま縫い付けて川に流すという死刑を求刑されたセクストゥス・ロスキウス・アメリーヌスの弁護人となり、この弁論によって無罪を勝ち取った。以下では、祖法によれば親殺しは重罪であるから簡単に殺しはしないこと、また皮袋に縫い付けることですぐには死ねないこと、またその死体が自然によって清め

ス・]トゥリウス[・キケロー]は以下のように言った。“ああ、驚嘆すべき知恵者である裁判員諸兄！すべてのものがその源を有していると言われているそのすべて−空を、太陽を、地を、水を−自らの誕生を負っている父親を殺したこの男から直ちに奪い、万物の摂理から切り離すように、祖先たちはしてこなかったのではないでしょうか？[133]何ゆえに生き物にとっての空気、死者における地、波に浮かぶものどもにおける海、海から打ち上げられるものにおける浜は近しいのでしょうか？[しかるに]自然は親殺しの犯罪者が[刑を受けてからもしばらく]生きることを許すでしょうが空気を吸うことはできず、死んでも地はその骨を覆うことなく、波に浮かんでも洗われることはなく、最終的に浜に打ち上げられたとしてもその骸はむきだしの岩の上で休息することすら許されないのです。”もしあなたが中国語で書いて中国人から賞賛を得たいならば、[その]将来のためにあなたの才能を割くべきである[134]。

次いで、もし声調が役立つことを無視すれば、それらを実際[の作文]に応用することもできないし、中国語で書くよう試みることもできない。たしかに中国の散文では、ギリシャ人やローマ人の[散文の]ように、そこまで厳格に詩文のような韻律を守るわけではない。それでも、デモステネス[135]と[マルクス・]トゥリウス[・キケロー]は他の弁論家よりはるかに優れているが、それは才能と表現の豊かさから自ずと生じるようなものではなく、鋭敏で繊細な耳のみが分かるような、得るべく熱心に努めたところの諸規則にとりわけ負っているのだ。さらに、中国語の微細な声調は、ギリシャ人とローマ人がかつて音節量[136]に対して配慮していたよりもずっと細かく音節[の配置]を規制する。それらすべてが同じ声調を持つということがない限り、きわめて多くのフレーズは、同じ数の文字から成って続くことがよくある。しかし同じ声調がずっと続いて耳を刺激するならば、その言葉は中国人が信じがたいほどの嫌悪をもって読んだり聞いたりするものとなってしまうだろう。

中国語の正しい声調を習得することは極めて難しい、とヨーロッパ人は考えるが、彼らは誤っている[137]。なぜならば、すでに私が他の箇所で告げたとおり、[中国語の]5 つの声調は[作文上必要な区分としては]「平」ping と「仄」tse[の二種類]に減っているのであるから。Ping-ching<平声>は[口語における]二つの声調から成り、「−」と「∧」[の声調記号を持つ音節]である。Tse-ching<仄声>は他の三つ「/」「\」「∪」[の声調記号]を持つ。そしてちょうどあるもの

られたり安んぜられたりしないことを言う。

133 キケローの原文ではここに長い 1 文あるがプレマールは省略している。

134 英訳本は「学習者が中国語で書いて中国語で話す人々の賞賛を得るとすれば、このようなお手本に従い、その言葉と思考のよい配列を学ぶ[時]だろう」と訳す。

135 ギリシャの政治家。雄弁家として著名。弁論家として頭角を現し、政界に転じてからアテナイを指導してマケドニアに対抗するが失敗して自殺した。BC.384 頃-BC.322。

136 ラテン語における音節の長短のこと。注 138 を参照。

137 英訳本は改行しない。

は長くあるものは短いという我々[ラテン語]の音節のごとく、[平仄によって字の選択を]変えねばならない[138]。また、[ラテン語で]正統な短長格[139]の詩を作るのはどれだけ難しいことであろうか。つまり [以下のように]短い 6 音節が奇数の位置を占め、残りの長い 6 音節が偶数の位置を占めるような 12 音節を選ぶということだ。

Běātŭs īllĕ quī prŏcūl nĕgōtĭīs[140] “煩わしさを離れた者は幸いである”

さらに私が述べたように、「仄声」tse-ching に終わる一つ或いはそれ以上のフレーズの後に、「平声」ping-ching に終わる一つ或いはそれ以上のものを続けること、そしてそのフレーズ内において「平」ping あるいは「仄」tse が[規則よりも]多すぎて耳を刺激し嫌悪を生ずることのないように、[フレーズの]骨格を一気に優雅に組み立てるというのは、何と困難なことであろうか。我々[ヨーロッパ]では、若者たちは短期間でギリシャ語とラテン語のあらゆるジャンルの詩作を習得するが、宣教師たちは ping<平>と tse<仄>の声調を区別することも、一回で正しく[文中に]配することもできない。誰がこのようなことをまじめに言うであろうか。[とんでもない、宣教師でもできるのだ。]

たくさんの細かい規則を、私が注記によって述べる諸例のためにここであれこれ加えるのは誤っていよう。[それよりも]諸例そのものを通じた方がずっとよく[頭に]入るし、ずっとはっきりと理解されるだろう。

<待続>

付記:本稿は平成 28 年度科学研究費補助金(基盤 C)「欧文資料 *Notitia Linguae Sinicae* による清代中国語研究」(課題番号 26370509)による研究成果の一部である。

---

138 漢語の平仄をラテン語の音節の長短になぞらえて説明している。ラテン語には母音の長短の区別があり、また音節は CV か CVC のいずれかである。いま長母音を V1, 短母音を V2 で表すと、音節のパターンには CV1/CV1C/CV2/CV2C の 4 種がある。ここで CV2 を短音節、残り 3 種を長音節という。音節の長短は語のアクセントの決定にも関わり、また詩作上の格律もこれに基づく。

139 原文 iambus. ラテン語の韻文における韻脚(pes)の一つ。単音節+長音節のパターンが続くもの。

140 ホラティウスの *Epodes*.2.1.本来は Beatus ille, qui procul negotiis paterna rura bobus exercet suis “煩わしさを逃れ、先祖伝来の田舎にあって自分の牛で耕す人は、幸いである”。母音上の記号は「—」が長音節、「∪」が短音節を示す。